

脱衣室はひとときわ広くて豪華な造りをしていた。ドラゴンギルドの中枢部というのもうなずける。

床には色鮮やかなモザイクタイルが輝き、壁や柱は焦茶色のウォールナット材で統一されていた。等間隔に設えられた陶器製の洗面台と真鍮の蛇口。その手前に並ぶ優美な猫脚の肘掛椅子。大棚には小さきまぎまのタオル、香油や香水の瓶、櫛や歯ブラシが収められていた。

この部屋にもフロマン社の振り子時計があり、そのほかにも大型の鏡、軍服を吊ったラック、アイロン台、給茶のための小さなかまどまで設置されている。

そして、部屋の端にあるゴブラン織りのソファに一匹の——否、一機の竜が長い脚を組んで座り、分厚い本を読んでいた。

「よかった、フォンティーンがいた。彼、とっても優秀なの。視察の試行の適任だと思うよ」
フォンティーンのことには憶えている。宮殿で倒れたリシュリーをここへ運び込んだ竜だ。

今は裸だが、腰まであるまつすぐの銀髪を後頭部の高い位置で束ねているのは、あのときと同じだった。

「フォン、リシュリー王子が元気になったよ。彼は地方の視察がお仕事なんだって。警護をお願いできる？ ほら、ボスが『第四王子の警護を任務のひとつとする』って言ってたでしょう。

フォンの任務中に王子は近くを視察するから、連れて行ってあげて。王子が一人で行動しても大丈夫な範囲と時間はフォンが決めるんだよ」

リシュリーは、ジュストの言葉につづけて自分からも頼もうとした。しかし書籍から視線を放さず、無言で眉間の皺を深くするフォンティーンを前にためらってしまふ。

銀の髪と水色の鱗を持つ美丈夫は、かなりの間を置き、「やや面倒くさい」とつぶやいた。

「あら、どうしちゃったの。もしかしてご機嫌ななめ？」

「……………。おまえが私の軍服を脱がさないからだ」

「ええっ、自分で脱いだの？ ごめん…………！」

本を閉じたフォンティーンが指だけを動かしてジュストに「来い」と示したのと、ジュストが竜の太腿に座って首に両腕をまわしたのは、ほぼ同時のように見えた。

二人の行動にびっくりするリシュリーをよそに、フォンティーンは長いまつげを伏せ、指でジュストの唇をなぞる。

「ジュストは私に付く日だろう。どこをうろついていた？」

「ううん、うろろろなんてしてないよ。大事な話があつて、リシュリーちゃんと一緒にボスのところへ行つたの。でも、一人で脱ぐようなことさせてごめんね、億劫だったよね。もう二度とさせないよ、約束するから機嫌なおして」

二人が妙な雰囲気を醸し出すので、リシュリーは見てはいけけないような気分になった。ジュストは片手をするすると下げ、フォンティーンの厚い胸板をゆっくりと撫でる。

「帰還したら念入りにオーバーホールするよ。下着も穿かせるし軍服も着せる。ブーツもね。

そのあとはフォンの好きなアレしよう？　ねえ、リシュリーちゃんを連れてつてくれる？」

「……今日、私が出動するゲートの番号を憶えているか」

「もちろん。第一ゲートだよ。帰還は第三ゲート。リシュリーちゃんを乗せて安全飛行で帰ってきてね。僕、第三ゲートで待つてる……」

ジュストはフォンティーンの耳孔に甘ったるい息を吹き込みながら、髪を束ねている紐をほどいた。面倒だと言っていた彼がいつその気になったのか、リシュリーにはわからない。ジュストをソファにおろして本を預けると、長い銀髪を振りながら立ち上がる。

「来い、リシュリー。第一ゲートへ行く」

「えっ、あの……」

動揺しすぎておかしな反応をしてしまった。それを見たジュストがくすくすと笑い、口の動きと仕草だけで「行つてらっしゃい、頑張つてね！」と伝えてくる。

リシュリーは慌ててフォンティーンのあとを追ひ、水色の鱗が浮かぶ背に向かって言った。

「よ、よろしく頼む……」